

大学図書館における学生協働の意義と課題 —十文字学園女子大学ライブラリーサポーターの活動を中心に—

Significance and Issues on Student Collaboration in University Library: through
Library Supporter in Jumonji University

石川 敬史¹⁾
Takashi ISHIKAWA

近藤 秀二²⁾
Shuji KONDO

安達 美奈子³⁾
Minako ADACHI

兵賀 房代⁴⁾
Fusayo HYOUGA

泉 佳代子⁴⁾
Kayoko IZUMI

要旨

近年、大学図書館における学生協働が拡大しているが、はたして大学図書館における学生協働には何が求められ、どのような可能性があるだろうか。すでに大学図書館における学生協働に着目されてから10年以上が経過しており、高大接続、入試制度の変化、地域と大学との連携など高等教育政策の改革を背景に、各大学図書館で毎年積み重ねられた学生協働の意義や活動内容を再確認する時期に差しかかっている。

本稿では、学生協働の概念や意義を再確認したうえで、2011年に組織化された十文字学園女子大学図書館におけるライブラリーサポーターのこれまでの活動を時系列的に分析し、特徴や可能性を明らかにするとともに、大学図書館における学生協働の課題を考察した。

その結果、ライブラリーサポーターの活動は、①土台づくりの活動（2011～2012年度）、②発信を重視した活動（2013年度）、③連携・学びあいへ広がる活動（2014～2015年度）、④学生の主体性を模索する活動（2016年度以降）に区分することができた。こうした活動は、教員や図書館員のイニシアティブをもとに、外部団体・機関の関係者などを含めた他者との関係性の構築や、学生同士の相互承認がゆるやかに生成されたこと、地域に位置する館種をこえた図書館関係者との協働の可能性を秘めていること、ゆるやかな学びあう場がおのずと形成されている特徴があった。その一方で、①協働することが目

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部 文芸文化学科

Department of Literature and Culture, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾ 十文字学園女子大学学術情報部

Academic Information Division

³⁾ 十文字学園女子大学学術情報部研究支援課

Academic Information Division, Research Support Section

⁴⁾ 十文字学園女子大学学術情報部図書課

Academic Information Division, Library Section

キーワード：学生協働，大学図書館，協働，共同，協同

的なのか、②学生協働の主体は誰なのか、③持続可能な協働であるのか、という学生協働における課題を明らかにした。

大学図書館における学生協働において活動内容は常に変化するため、枠組みが形成され制度化された安定的な活動ではない。成果ばかりを追い求めることなく、活動の意義と目的を共有し合い、学生と教職員ともに省察するプロセスをしっかりとつくることが求められる。

1. はじめに

近年、大学図書館における学生協働が拡大している。毎年開催される図書館総合展においては、ポスターセッションや図書館キャラクターグランプリにて学生主体の活動報告が相次いでいる。また、大学を超えた学生団体間の交流も広がっている。例えば、2011年度から始まった中国地区4大学による「大学図書館学生協働交流シンポジウム」(現在は中国四国地区大学図書館協議会が主催)、図書館総合展における「全国学生協働サミット」の開催(2016年度から)、東京都内の大学により開催される「学生協働ワークショップin東京」(2014年度から)、さらに近年では2017年9月に開催された「学生協働フェスタin東海」などがある。

大学図書館における学生協働の取り組みによって、大学図書館活動の活性化や協働に関わる学生の主体的な学び、図書館員も含めた学生同士の学びあいなどに結びつくことは、すでに多くの記事において報告されている¹⁾。しかし、はたして多くの大学図書館において学生協働の取り組みが直ちに成功し、豊かな図書館活動へと直結しているのだろうか。もちろん、その過程には、学生と図書館員との考えの相違・ジレンマ、持続的な活動に向けての取り組み、学生間のスケジュール調整や意思疎通の方法、日常業務を抱える図書館員の負担や業務委託スタッフとの関係性など、活字化することができない数多くの課題もあろう。

大学図書館において学生協働を行うこと自体が目的ではないことはもちろんである。しかし、そもそも学生協働には何が求められ、どのような可能性があるだろうか。すでに大学図書館における

学生協働に着目されてから10年以上が経過²⁾している。現在も全国の大学図書館において学生協働が広がる中で、高大接続、入試方法の多様化、地域と大学との連携など、高等教育政策の改革を背景に、各大学図書館で毎年積み重ねられた学生協働の意義や活動内容を再確認する時期に差しかかっているのではないかと考える。

本稿では、学生協働の概念や意義を再確認したうえで、十文字学園女子大学図書館(以下、本学図書館とする)におけるライブラリーサポーター(以下、LSとする)のこれまでの活動を分析し、大学図書館における学生協働の課題を考察する。

2. 大学図書館における「協働」の意義

2.1 「協働」を読み解く

「学生協働」という用語の中にある「協働」にはどのような意味があり、どのような概念を内包しているのだろうか。大学図書館における学生協働には、何らかの活動を学生らと一緒に行うことに留まらず、学生同士や図書館員との学びあい、学生の成長や主体性の形成などが強調される。本章では、単に一般的な用語の意味を羅列するのではなく、こうした学びあいを前提に「協働」を読み解いていくため、「共同学習」をはじめとした足元の生活を基盤とする学習者間の学びあいや、行政と住民とのパートナーシップなど、住民が学習の主体となる学習論³⁾をこれまでに構築している社会教育学の視角から「協働」の意味を再確認していきたい。

(1) 「共同」

「協働」とは異なり、「共同」や「協同」という用語も存在する。「共同」とは「複数の人や団体

が、同じ目的のために一緒に事を行ったり、同じ条件・資格でかかわったりすること」⁴⁾である。自治会や青年団などの地縁の団体を基盤に形成されてきた。すでに社会教育学においては、1950年代以降、少人数グループによる話しあいの学習活動を背景に共同学習論が確立されてきた⁵⁾。共同学習とは、「対等な関係の中で、生活の実態から課題をみつけ、メンバーが経験を踏まえた意見を出し合いながら解決のための方法を考え実践に移す一連の学習活動」⁶⁾である。ここでは対等な関係性、さらには相互依存的な関係性、そして生活実態を改善する実践・活動そのものが重視されている。

(2) 「協同」

他方で「協同」とは、「複数の人または団体が、力を合わせて物事を行うこと」⁷⁾であり、「自立した個人や集団を前提とした協力関係」⁸⁾を示している。よって協同学習とは、「共通の学習目標を達成するために、メンバー一人ひとりが相互に助け合いながら積極的に取り組む学習活動」⁹⁾である。このように「協同」とは、NPO活動や協同組合などの団体が互いの個性をもって、役割分担を明確にして力をあわせる協力関係であり、必ずしも共に（一緒に）活動することではない。

(3) 「協働」

一般的に「協働」とは、「同じ目的のために協力して働くこと」¹⁰⁾である。社会教育学の視角からみると、「各々が責任と役割を担い、共通の目的の実現に向けて協力して取り組む実際の労働」であり、「協働の前提となるのは、自立・自律的な個人および組織の確立」¹¹⁾であると指摘される。このように「協働」とは、人と人とのネットワークの構築や共に何かを行うこと自体を指すのではなく、一人ひとりの多様な人間性を尊重しあうことを前提とした労働であることがわかる¹²⁾。したがって、こうした協働の概念には、他者性の認識、相互承認、省察が含まれている。むしろこれらが喪失されている場合、アルバイトのような代替者としての下請け労働や、単なる個

人・集団との契約行為に矮小化されてしまう。

2.2 学生協働とは何か

(1) 定義

こうした「協働」の概念をふまえながら大学図書館における学生協働について検討する。かつて八木澤ちひろは、学生協働について「図書館活動の一端を、職員とともに、利用者である学生が担う活動」であり、「自発的・自律的に学習支援に関与し、図書館スタッフの一員としての働き」¹³⁾としている。また、平尾元彦は、関係者の信頼性やコミュニティ形成を重視した「大学図書館の運営に主体的にかかわる学生活動」であり、「達成すべき課題あるいはその解決方法自体を創発し、実践する」¹⁴⁾としている。さらに、「学生協働ワークショップin東京」においては、「大学図書館において、学生同士あるいは学生と職員が共通の目的のため、協力して共に活動すること」¹⁵⁾と定義している。

こうした定義には、①学生の自発性や主体性の尊重、②学生の組織マネジメントの経験やキャリア形成、③学生同士や図書館員とともに学びあい成長すること、などの要素が含まれている。しかし、平尾を除き、総じて学生との協力関係のある大学図書館の活動そのものに焦点が当てられる傾向にあるといえる。そこで、前節で触れた「協働」の概念も踏まえながら大学図書館における学生協働を整理すると、次のように定義できよう。

大学の理念や大学図書館の目的を実現するため、複数人の学生が教職員らとともに、他者性を認識し尊重しあいながら、図書館運営へ主体的に関わる創造的な活動であり、実践を反省的に振り返る成長と相互承認を含む働き

学生が受動的であり、かつ被教育者としての立場ではなく、能動的で主体的な姿勢にもとづく協働が前提になる。

(2) 活動内容

大学図書館における学生協働の具体的な活動内容については、すでに八木澤¹⁶⁾や森實彩乃¹⁷⁾が例示している。また長谷川淳史¹⁸⁾も学生協働団体の動向をまとめ、土屋泰一¹⁹⁾も「全国学生協働サミット」の取材を中心にその特徴を整理している。これらを踏まえながら具体的な活動内容を整理すると次のようになる。

- ①図書館内業務（館内案内、図書装備、排架、ICT機器サポートなど）
- ②選書（選書ツアー、POP作成、特設コーナー設営、ビブリオバトルなど）
- ③学習支援（サポートデスク、図書館利用支援など）
- ④行事・イベント（学園祭、交流会の開催など）
- ⑤広報・情報発信（広報誌、SNS、展示・掲示作成、キャラクター制作など）
- ⑥地域貢献活動（地域活動、おはなし会、他館種との連携など）
- ⑦その他（カフェ運営など）

もちろんこれらは形式的な枠組みであるため、各項目にて重複する活動もあろう。しかし、これまでの事例報告にもある通り、大学図書館における学生協働には実に多彩な活動が広がっていることから、今後はこうした枠組みに拠ることのない学生協働のさらなる可能性があろう。

その一方で重要なのは、学生や図書館員がこうした大学図書館活動を「学生協働」としてどのように認識しているのか、という点である。やや厳しい言及となるが、例えば学生は大学図書館が提供する学生参画型「サービス」の受益者として認識してはいないか。他方で、図書館員は学生アルバイトの「代替者」として、さらには図書館員の業務の負担軽減や、大学図書館の実績づくりとして捉えている可能性も否定できないであろう。「学生参画」ではなく「学生協働」であるならば、大学図書館において何のために学生協働を実施し

ているのか、学生協働により何を実現するのか、などについても関係者同士で見つめ直すことも大切である。学生協働の成果をともに実感しあいつつも、学生協働の目指すべき方向性を持続的に共有しあい、ともに省察できる場が創られていることが重要であろう。

3. 本学図書館におけるLSの活動

本学図書館のLSは2011年度に組織化された。本学、さらには本学図書館としても、サークルや部活動ではない学生有志の団体との協働は初めての取り組みであったため、本学図書館には活動のための予算も無く、学内の認知度も低い状態からのスタートであった。本章では、組織化され約7年が経過したLSの活動について、その目的や活動内容、成果を時系列的に分析し、本学図書館において学生協働がどのように広がったのかを明らかにする。

3.1 LS前史・学生アルバイトの導入

LSが組織化される以前、1997年度末に本学図書館にて学生アルバイトが導入された。この背景には、図書館情報システムの導入に伴う図書バーコードラベル貼付作業がある。また1998年度後期からは20時まで開館時間を延長するために学生アルバイトを導入し、現在に至っている。

学生アルバイトの業務内容は、貸出・返却などのカウンター業務、返却図書の排架、書架整理、案内掲示の作成、閉館業務が中心である。例年10名前後の学生が登録（司書課程学生が中心）し、図書館員がローテーションを作成している。学生アルバイトからは、司書課程の学びを实践することができること、具体的な図書館業務に携わることができるという意見が多く、学生のキャリア形成や図書館活用法の習得にも結びついている。こうした学生自身の学びや成長に結びついた学生アルバイトは、現在の本学図書館における学生協働の源流となっている。

3.2 土台づくりの活動 (2011~2012年度)

2011年度に発足した本学図書館のLSは、大学を地域に開放し、学生が地域活動を担う流れの中で「図書館を良くしていこう」という思いを抱いた学生有志の団体である。初年度は主に司書課程を履修する6名の学生により、選書ツアー、POP作成、館内展示を中心に活動した。2012年度になると新入生の加入により、メンバーがやや増加(10名)したことや、1年間活動した学生の経験から、LSの活動は広がりを見せるようになった。例えば、国立女性教育会館女性教育情報センターと連携して、同センターでの選書ツアーを実施した。選書した図書については、LSが1冊ずつ図書の帯を作成し本学図書館に展示した。

この成果は、2012年度の第14回図書館総合展ポスターセッションに初めて参加し報告することができた。学生にとっては、同展が他大学や企業などの図書館関係者らに活動を報告する初めての場であった。こうした活動を踏まえ本学図書館では、学生協働を支えるための予算の申請や年度計画の策定、さらには図書館運営委員会においても

継続的に活動を報告した。

この2年間は、「学生協働」とはいえ、白紙の状態から手探りで活動を進めていた時期であった。結果的に現在の活動の土台となる時期であるといえるが、当初は全てを学生に任せることは難しく、活動の多くに教員と図書館員の先導が伴っていた。また、LSの一つひとつの活動も全員参加で進められた。

3.3 発信を重視した活動 (2013年度)

2013年度においてもLSへの加入を希望する学生数は増加し続けた(22名)。2013年度は前年同様に教員と図書館員がLSの活動の方向を提示しながらも、学生の意見をできるだけ活かしながら、学内における情報発信を重視した活動を展開した時期である。学生数が増加したため、多くの活動は教員や図書館員の支援によって役割分担する傾向にあり、LS内におけるチームマネジメントやLSメンバーの一体感が求められた時期であった。

(1) 図書館情報誌『クロス』の刊行

LSの活動を学内に周知すること、学生自身がLSの活動を言語化して振り返ることができること²⁰⁾を目的に、A4判両面1枚(カラー)の図書



写真1. 2012年度図書館総合展ポスターセッション



写真2. 『クロス』1号

館情報誌『クロス』を2013年度から刊行した。2013年度は3号まで刊行したが、構成案や取材、原稿作成、デザインなどすべてLSの学生が分担した。学生の負担にならないよう留意し、記事内容や文章表現については図書館員が複数回確認したうえで、印刷についても図書館員が印刷会社へ発注した。

(2) 学内公募による図書館キャラクターの誕生

2013年度には、LSの希望が最も多かった本学図書館キャラクターを策定した。具体的な進め方としては、次に示したようにプロセスを重視し、選定する全ての場面にLSが関与した。

- ①「図書館を“親しみのある空間”へ変えてみませんか？」というキャッチフレーズのもと、Webページ、ポスター、『クロス』などによる学内への周知
- ②学内（学生）から156点の応募作品を整理
- ③LSや図書館運営委員（教員）、図書館員が投票して選定し、30点（入選）に絞り込み
- ④2013年度第15回図書館総合展ポスターセッション来場者や本学図書館来館者の投票により3点に絞り込み
- ⑤学長による最終選考

LS内におけるさまざまな意見を交換する機会をつくるなど、LSとともに選定していく過程を重視した「キャラクターづくり」によって「もっくん」が誕生した。「もっくん」の存在は、LSに



写真3. 本学図書館キャラクター「もっくん」

における活動の可能性を学生間で共有する契機となった。

(3) 図書館イベントの実施

本学図書館のイベントとして初めて計画した2013年度のクリスマスコンサートにおいて、LSはポスター・プログラムデザインの制作、図書館内会場の装飾、当日の司会、案内誘導などを担った。クリスマスコンサートには学生・教職員100名以上が集まり、大きな賑わいをみせた。アンケートの結果、「大変よかった」が66%を占め、「図書館でコンサートが新鮮でした!」、「図書館でコンサートという新しい発想」と好評であった。LS内での役割分担と活動への責任感、成功させたという学生の思いから、自ずとLS内での一体感が育まれた。

(4) 図書館総合展への参加

2012年度以降も図書館総合展ポスターセッションの発表を継続した。その理由には、活動を外部に発信する場としてLS内の共通の目標ができる



写真4. 2013年度図書館総合展ポスターセッション

こと、学外の図書館関係者へのプレゼンテーションによって学生の成長につながることもある。

2013年度の図書館総合展では、図書館キャラクター投票参加型のポスター『『クロス』する図書館づくりへの挑戦』が高く評価され、優秀賞を受賞することができた。この受賞によって、LS内で積み重ねた活動の成果を共有することができたこと、本学内にてLSの認知拡大につながったこと、さらに他大学図書館における学生協働全体の動向の中で、本学図書館のLSの活動を考える契機となった。

3.4 連携・学びあいへ広がる活動（2014～2015年度）

2014～2015年度は、学内の活動にとどまらず、外部との交流やつながりをつくる活動へと拡大した時期であり、学生同士による学びあいの機会が増加したことに特徴がある。LSの学生数は2014年度が39名、2015年度32名へと増加し、両年度についても、選書ツアー・POP作成、『クロス』の刊行（2015年度までに8号刊行）、クリスマスコンサートの支援に携わった。確かにこの時期においても、教員と図書館員がLSの活動の方向性を示していたが、しだいにLSの活動を積み重ねた経験豊富な上級生を中心に、「ゆる活」というキーワードを活動の理念に掲げ、LS内学生一人ひとりの自主性や多様性が重視されるようになった。

この時期の特徴的な活動は、以下の2点に整理することができる。

（1）企業と連携したグッズ開発

第一に、本学図書館キャラクター「もっくん」のグッズ開発である。このグッズ開発については、グッズをつくることが目的ではなく、そのプロセスを通してLSが学びあうことにある。その方法は、①LSがどのような種類のグッズを開発するかを検討し、②LSが企画案を複数作り、LS内で検討して正式な企画書を策定、③LSの企画書をもとに企業数社より提案書（デザイン



写真5. オリジナルグッズ

案含む）の提出、④LSが企業数社の提案書を検討して発注先企業を検討、⑤発注する企業担当者とともに本学にて数回の打ち合わせ、という過程であり、グッズの種類の検討から納品までに約半年の日数をかけた。

こうしたプロセスにより、2014年度はカフェ店員をイメージしたオリジナルエプロン、本をイメージしたオリジナル付箋2種類、入選した30点すべてのキャラクターをデザイン化したブックカバー（4種類）を相次いで開発した。2015年度も同様の方法によって、「もっくん」を真正面・真後ろから描いたオリジナルクリアファイル、これまでの図書館総合展ポスターセッションにおける実績を紹介した名刺デザインメモピットを開発した。

これらのグッズ開発は、LSが検討を重ねた企画案を、企業担当者（営業、デザイナー）からのアドバイスを頂きながら、時間をかけてともに創

りあげたものである²¹⁾。LSによる「もっくん」への思いを背景に、発注先の企業担当者の方々とともに検討しながら、オリジナルグッズを生み出していく過程を体験することは、緊張感が生まれ、責任感が育まれたとともに、同一の目標をLS内で持続して共有する仕掛けともなった²²⁾。

(2) 学外団体などとの交流

2014年度からは学外の団体や機関との交流の機会が増加した。例えば、本学短期大学部表現文化学科による七夕イベントに参加した浴衣姿のLSが跡見学園女子大学新座キャンパスを訪問し、同大学の図書館ボランティアの学生らと交流したことや、本学学園祭に初出展した(栗と豆本づくり体験)ことなどがあげられる。オリジナルグッズの制作も含め、こうした2014年度までの活動をまとめた第16回図書館総合展ポスターセッションは最優秀賞を受賞し、その後開催された「図書館と県民のつどい埼玉2014」にも初出展した。さらに、株式会社ブレインテックが運営する「Jcross」の取材をも受けた²³⁾。

2015年度については交流の機会がさらに増える。例えば、埼玉県立新座高等学校の図書委員会・生徒との交流会(オススメ図書の紹介・POP作成など)をはじめ、「大学図書館学生協働シンポジウム」への参加(山口県・梅光学院大学)、本学学園祭への出展、跡見学園女子大学図書館ボ

ランティア・帝京大学共読サポーターズとの交流会などが行われた。これらの成果は、2015年度第17回図書館総合展において「図書館ネットワークin新座」として、跡見学園女子大学図書館、新座市立中央図書館、埼玉県立新座高校図書館、本学図書館の4者共同でブース出展により報告することができた。さらに、同展にて初めて開催された「図書館キャラクターグランプリ」では、「もっくん」が企業3社からの協賛賞を受賞し、同社社員との交流にもつながった。

3.5 学生の主体性を模索する活動(2016年度以降)

2016年度以降もLSの学生は33名(2016年度)、32名(2017年度)と、多数の学生によって、選書ツアー・POP制作、オリジナルグッズの開発(2016年度:新デザインの付箋とオリジナルシール、2017年度:オリジナルトートバッグ)、学園祭や図書館総合展ポスターセッションへの出展など、これまでLSが積み重ねてきた活動を持続した。

とりわけ、この時期になると、教員や図書館員からの指示や方向づけに従うのではなく、上級学年のLSらによるチームマネジメントをはじめ、主体的な企画立案や、役割分担を伴う自主的な活動が少しずつ模索するようになった。例えば、『クロス』については、「もっくん」の個性をさらに活かすために、2016年からTwitterでの情報発信へと転換し、発信者もLS内にて自主的に決められた。

加えてこの時期になると、LSとしての活動に留まらず、本学図書館の業務において図書館員との協働が広がった特徴がある。

(1) 本学図書館1階リノベーション

2016年4月に本学図書館1階は、アクティブラーニングが可能な能動的学習空間「+(プラス)ライブラリー」としてリノベーションされた。このリノベーションは、2015年度「私立大学等教育活性化設備整備事業(タイプ1:教育の質的転換)」において「+(プラス)ライブラリーによる主体的な学びの創出と活性化」として採択され



写真6. 埼玉県立新座高校
図書委員会との交流会



写真7. 書架移動作業



写真8. ヒトハコ図書館

た事業であり、すでに本学図書館で2012年頃から検討を重ねた図書館改装計画を踏まえたものである。この検討には、司書課程履修者（学生）や図書館運営委員会委員（教員）、LSの学生らの意見も反映され、本学図書館への「ありがたい姿」を持続的に図書館員と共有した過程がこれまでに存在した。

このリノベーションのうち、2016年2月から3月の図書移動作業をLSがアルバイトとして携わった²⁴⁾。具体的な作業内容は、1階に配置されている図書の箱詰めと台車での移動、2階・3階書架への再配架や図書移動である。とりわけ、3階書架については排架されている2/3以上の図書を移動することとなったため、LSは、図書館員、さらには株式会社紀伊國屋書店社員とともに作業を行い、本学図書館の基盤整備に携わった。

(2) ヒトハコ図書館

ヒトハコ図書館とは、小さな木枠1個（一箱）を一つの「図書館」とし、一箱毎に担当者（館長）を割り当て、テーマに沿った図書を選書・展示し、利用者と図書館資料とを結びつける活動を指す。類似の活動としては、東京・神田などで行われている一箱古本市がある²⁵⁾。この古本市は各人が持ち寄った古本を、段ボールに入れて販売するスタイルである。他方で本学図書館のヒトハコは、底が無い四辺の木枠であり、図書館用品を販売するキハラ株式会社²⁶⁾とLSとが打ち合わせを重ねて開発し、2016年10月に開館式を行った。ヒトハコの材質は温もりが感じられる木材でありな

がら、複数のヒトハコを重ねて図書を並べても頑丈な設計とし、長期間活用できるように留意した。

このヒトハコ図書館の完成によって、LS一人ひとりが館長となり、テーマの設定、選書、POPなどの装飾、図書展示を各自で責任を持って取り組むことができるようになった。その結果、図書館員では気がつかないテーマの発見、書架に眠っていた図書の発掘と同時に、LSのさらなる自主性や主体性を引き出す仕組みができた。

(3) 高等学校図書委員会との交流

埼玉県立新座高等学校の図書委員生徒との交流会（2015年度）が契機となり、2016、2017年度に埼玉県立朝霞西高等学校の図書委員生徒との交流会が行われた。この交流会は同校・図書主任教諭からの依頼であり、学校図書館の活性化や高大連携を以前より検討していたことが契機であった。

交流会のプログラムは、本学教員のミニ講演の後、「合同ワークショップ」と題して、LSと同校生徒との混合の班による「ヒトハコ図書館」づくりを実施した。2016年度はLSが9名と同校生徒15名が、2017年度はLSが7名と同校生徒18名が参加した。事前にLSが班のテーマを設定したうえで、該当する図書を同校図書室内から選書し、POPなどの展示物を制作した。各班の発表も含め2時間程度の時間であったが、LSは生徒の個性や意見を尊重しながら班をとりまとめた。他方で生徒は、大学生生活や入試、就職活動など、自身の未来に向けた問題意識を、LS（大学生）と意

見交換できる機会となった。

この活動は、大学生と高校生とが同一の目標を掲げ、チームワークにより成果物をつくり共有する過程で多くの学びにつながる。学校教育と高等教育、両者の接点である大学入試とを一体的に改革する高大接続改革²⁷⁾において、図書館活用の接続の可能性がこの活動を通して視ることができた。

(4) 「出張図書館もっくん」

「出張図書館もっくん」とは、学生が多く集まる場所・時間帯に、選択された図書館資料を移動し、図書館活動を行う「移動図書館」である。その目的は、①図書館利用の少ない学生に多様な主題領域にわたる図書館資料の存在を知ってもらうこと、②継続的な図書館利用の契機に結びつけることにある。構想時点では、本学図書館の学生アルバイトとの協働により、日替わりの学生アルバイトがともに達成感を得るという目的もあった。具体的な方法は、尚綱大学図書館²⁸⁾の先行例を参考にしながら、学生アルバイトが場所や時間、展示テーマなど思いつくことをA3用紙に書き足しながら練り上げた。LSが「出張図書館もっくん」と命名し、図書館員中心の選書ではあったが、POP制作や掲示、装飾、図書リストの作成などの準備は複数の学生アルバイトが相互に刺激を受けながら携わった。

「出張図書館もっくん」の第1回目は2017年10月18日(水)と20日(金)の12:20～12:50、本学7号館1階のエレベータフロア(カフェテリア



写真9. 出張図書館もっくん

前)にて開館した。テーマは「〇〇の秋」とし、食欲、芸術、スポーツ、読書などに関する図書館資料約180点を選書し、展示した。LSがデザインした専用ののほりを立て、BGMも流しながら、学生アルバイトに留まらず、LSも呼び込みに協力した。

この2日間で、来館者90名、貸出者数32名、貸出点数50点という実績を残した。成果としては、本学図書館の未利用者と思われる学生と学生アルバイト・LSとの積極的なコミュニケーションがあげられる。学生アルバイト・LSから、「やってよかった」、「次回はいつですか」などの声があり、とりわけLSとして活動を続けたい意向があった。そこで、LSの3年生が中心となって第2回目の企画案を作成し、これに学生アルバイトの意見も加えながら実施方法を練り上げた。

第2回目は2017年12月12日(火)と15日(金)の同時時間帯に「冬～年末年始のお楽しみ」をテーマとして開館した。第1回目との変更点は、昼休みの時間帯に数多くの学生が滞留する学生ホールへ場所の変更、LSを中心とした選書、クリスマス直前の時期のため包装紙(袋)に図書を包んだ福袋貸出の実施、という3点である。この2日間の利用状況は、来館者49名、貸出者数13名、貸出点数24点となり、第1回目より利用は減少した。しかし、LSが準備した福袋貸出に注目が集まり、学生同士で数多くの会話が広がったこと、第2回目の利用減少の要因を図書館員とLSとで検討することにもつながった。

3.6 積み重ねられた活動

こうして2011年度に組織化されたLSの活動を現在まで時系列的に分析していくと、以下の特徴や可能性があろう。

(1) 生成される組織文化

「協働」とはいえ、LSが組織化された当初から学生の主体性にもとづく活動は難しく、まずは教員や図書館員による指示や方向づけ、スケジュールリングなどの先導が求められたことである。本学

図書館のLSの場合、教員、図書館員、学生が一緒に行う活動から、しだいに「参画」へ、そして「協働」へと時間をかけて育まれた。LSの活動が図書館業務に結びつく活動は、2016年度以降にみられるようになった。階段をのぼるように右肩上がりでLSの活動が着実に発展したのではなく、教員や図書館員のイニシアティブをもとに、外部団体・機関の関係者などを含めた他者との関係性の構築や、LS内学生同士の相互承認がゆるやかに生成された特徴がある。

(2) 図書館という「ハブ」の可能性

オリジナルグッズの開発過程に携わることにより、プロジェクトは一人で動かすことはできず、図書館業務もチームで担われていることを学生は体感する。加えて、他大学図書館の学生協働団体や図書館関係企業、高等学校図書委員生徒らとの交流・つながりから、図書館とは1館単独でその目的を実現することができず、図書館ネットワークの重要性の認識に結びつくこともあろう。このことは、相互利用・相互貸借などの単なる図書館業務としての図書館ネットワークに留まらず、本学図書館の学生協働が、大学図書館、学校図書館、公立図書館といった図書館種をこえた関係者（利用者、ボランティア、図書館員、図書委員会生徒、図書館企業関係者など）とのネットワークに広がる可能性を秘めている。かつて本学では、新座市民総合大学（新座市・新座市教育委員会主催）において「文学部子どもの読書応援学科」が開講していたことも、ここに結びつけて考えることができる。すなわち、大学図書館における学生協働は、地域に位置する館種をこえた図書館関係者との協働や、地域の図書館活動の創造へ結びつく可能性がある。

(3) 学びあう場の形成へ

本学図書館の学生協働は、図書館キャラクターやオリジナルグッズの開発、他団体・機関との交流など、学生協働による活動そのものが目的ではなく、たどり着くまでともに歩むプロセスと成果の共有を重視した活動であることが特徴である。

企画力や調整力、スケジュール管理など、階段式に積み上げて成果にたどり着くプロセスのみならず、アイデアが出ず、人も集まらず、失敗し、前に進まない場合でも、学生の個性や多様性を認め合い、改善しつつ、自身の意見を相対化し、変化する目標を共有しあうといった、ゆるやかな学びあう場がおのずと形成された。もちろん、こうした場にも教員や図書館員が加わっている。教員や図書館員はやる気を引き出すという指導者的な立場に留まらず、「やりたいこと」と「できること」とをLSとともに合意形成していくなど、本学図書館についてともに考える場が形成されている。

4. 大学図書館における学生協働の課題

本学図書館のLSを事例に学生協働の特徴や可能性を分析してきたが、その一方で課題もある。本学図書館のLSの活動も含め、大学図書館における学生協働を批判的に読み解くと、以下のように整理することができよう。

第一に、無意識的に協働することが目的になっていないか、ということである。この背景には、協働という言葉が他者に与える肯定的イメージの存在や、協働による成果や学内の評価を図書館員が得たいという意識もあるのではないかと考える。学生協働のみならず教職協働も同様ではあるが、成果ばかりを追い求めることなく、活動の意義と目的を共有し合い、学生と教職員ともに省察するプロセスをしっかりとつくることが求められるよう。

第二に、学生協働の主体である。具体的には、図書館員と学生とが「学生協働」の取り組みとして行いたいこととの「間」をどのように補いあうかという点である。もちろん両者には友好的な関係が持続するわけではなく、時には緊張関係も存在しよう。例えば、学生にとっては図書館への夢を積極的に語りあう活動（もしくは単なる趣味・遊び・居場所としての集まり）であっても、図書館員にとっては定型的な業務に対しての協働とは

異なるため困惑もあろう。学生協働が特定の学生個人の能力や技術に依存されることなく、さらには特定の図書館員のみのものでない主体形成に結びつくことではなく、多様性を尊重し合い、学生協働に関わる全ての学生や全ての図書館員が対等の関係性をつくりながら、相互依存的なプロセスを見つめていくことが重要であろう。

第三に、持続可能な協働であるのか、という点である。加えて、持続可能性を強調するあまり、枠組みが事前につくられた（もしくは他者から与えられた）活動になっていないか、という点である。強固につくられた枠組みが存在することによって、その活動自体に閉鎖性や、支配・被支配の関係性が生じてしまう可能性がある。いわば固定化した定型的な図書館業務とは異なり、学生協働の取り組みには、学生の進級や卒業、新入生の受入れなど、流動的なメンバーが前提であるため、大学図書館の学生協働として活動したいことも常に変化していく。だからこそ、「協働」に内包されている概念を持続し実践することが重要となろう。

5. おわりに

本学図書館におけるLSの活動をみていくと、熱心な学生とそうでない学生の温度差や、準備が直前に行われること、例会のスケジュール調整が難しいこと、活動状況を十分に把握できないこと、教員や図書館員への依存性など、細部にわたる課題があることは確かである。学生協働に関わる者（とりわけ学生）が何を得たのか、どのように成長したのか、というアウトカムズを「見える化」²⁹⁾する仕組みづくりも今後求められよう。また、本学図書館からの協働ではなく、学生からの協働へ転換することもLSの課題でもある。

かつて水越伸がメディアと人間や社会との関わりを批判的にとらえる営みを「メディア・ビオトープ」³⁰⁾と比喩を用いて表現した。大学図書館における学生協働についても、すでに枠組みが

形成され制度化された安定的な活動に落ち着くのではなく、さらには他館にみられないようなユニークな活動が先進的とされるのでもなく、学生と図書館員、図書館との関係性を見つめ直したり、学生自身のキャリアや生き方を展望したり、予算が少ないときにはともに知恵を絞るなど、互いに関わりあい、学びあい、循環しながら大学図書館に生み出される「ビオトープ」こそが意義があるといえる。

なお本稿は、埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）平成27年度第27回研修会における報告と『SALA会報』（No.24, 2016.3）に掲載された報告記事（石川敬史、安達美奈子）を大幅に加筆したものである。

■謝辞

本稿は、本学の大学改革特別経費（図書館）による活動として積み重ねられた成果のひとつです。LSの活動につきましては、安達一寿教授（2012年度まで図書・情報センター長）、東聖子名誉教授（2013～2016年度まで館長）より、長期間にわたり数々のご提案をいただき、親身に粘り強くご支援をいただきましたこと、心より御礼申し上げます。また、本学職員として図書館（学術情報部図書課）においてLSの活動に対し常に寄り添い、サポートいただきました、安達貞治氏、久保裕子氏、鈴木尚子氏、田村雄二氏、唐渡香澄氏、本望千尋氏、緑川里奈氏には深く感謝申し上げます。

■注・参考文献

- 1) 大学図書館における学生協働に関する近年の記事は、例えば次の特集がある。「特集・学生協働の取り組み：自主性と継続性をサポートするために」『大学の図書館』513, 2016.8, p.120-130.
- 2) かつて東京女子大学が2007年に「マイライフ・マイライブラリー」（文部科学省採択「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」（学

- 生支援GP)の一環として「学生協働サポート体制」を導入し、大きな注目を集めた。
- 3) 的野信一「学級講座における学習論の転形:「共同学習」の視点から」『大都市・東京の社会教育:歴史と現在』エイデル研究所, 2016.9, p.206-218.
 - 4) 「共同」『大辞泉』小学館, 1995, p.696-697.
 - 5) 千野陽一監修, 社会教育推進全国協議会編『現代日本の社会教育:社会教育運動の展開』増補版, エイデル研究所, 2015.
 - 6) 「共同学習」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店, 2012, p.111.
 - 7) 「協同」『大辞泉』小学館, 1995, p.697.
 - 8) 「共同・協同・協働」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店, 2012, p.110.
 - 9) 「共同学習」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店, 2012, p.111-112.
 - 10) 「協働」『大辞泉』小学館, 1995, p.697.
 - 11) 「協働(パートナーシップ)」『社会教育・生涯学習辞典』朝倉書店, 2012, p.110-111.
 - 12) 前掲8), 「共同・協同・協働」. 本項では以下, この記述を参考にした。
 - 13) 八木澤ちひろ「大学図書館における学生協働について:学生協働まっぶの事例から」『カレントアウェアネス』316, 2013.6, p.10-14.
 - 14) 平尾元彦「キャリアから考える学生協働」『大学教育』12, 2015.3, p.22-27.
 - 15) 学生協働ワークショップin東京2017 実行委員会「学生協働ワークショップin東京2017」<<https://sites.google.com/view/gakuseikyodo-intokyo/>> (2018.1.8参照)
 - 16) 前掲13), 八木澤ちひろ.
 - 17) 森實彩乃「図書館で働きたい人へ」『情報の科学と技術』64(6), 2014.6, p.223-229.
 - 18) 長谷川淳史「近年の大学図書館における学生協働:その動向と, 図書館サービスにおけるピアサポートの意義」『図書館雑誌』109(12), 2015.12, p.774-776.
 - 19) 土屋泰一「新潮流「学生協働」図書離れを食い止める!」日経BP社, <<http://www.nikkeibp.co.jp/atcl/column/16/gakkyo/>> (2018.1.8参照)
 - 20) 大学生の学びや初年次教育に関する方法論も参考にした(藤田哲也編著『大学基礎講座:充実した学生生活をおくるために』改増版, 北大路書房, 2006.)。
 - 21) 2014年度に作成した「もっくん」オリジナル缶バッジ(4種類)は, 最上級生のLSがデザイン版下を作成した。
 - 22) もちろん, 企業担当者もLSとともに検討することを通して, 学生が希望するデザインや, 現在の学生気質に触れることができたという。
 - 23) 「十文字学園女子大学ライブラリーサポーター注目!学生図書館サポーターズ」『Jcross』<<https://www.jcross.com/plaza/tokatsu/post-23.html>> (2018.1.8参照)
 - 24) 雇用者については, 本事業を受託した株式会社紀伊國屋書店であり, 同社の担当者から指示を受け, チームで作業を行った。
 - 25) 「特集・一箱古本市の楽しみ」『ヒトハコ』1, 2016.11, p.9-40.
 - 26) キハラ株式会社とはすでにオリジナルブックトラック制作にて産学連携の実績があった(石川敬史ほか「図書館司書課程における産学連携の教育実践:「図書館システムづくり」概念の構築と「移動」する図書館としてのブックトラックの創造へつなぐ」『十文字学園女子大学紀要』46, 2016.3, p.161-172.)。
 - 27) 本間政雄「高大「接続」とは何か? 大学は何をなすべきか?」『大学マネジメント』13(7), 2017.10, p.2-5.
 - 28) 北口己津子, 角田裕之「大学図書館における移動図書館に関する一考察:その効果と効率を中心に」『尚綱学園研究紀要』2, 2008.3, p.65-78.
 - 29) 遠藤功『見える化:強い企業をつくる「見える」仕組み』東洋経済新報社, 2005.
 - 30) 水越伸『メディア・ピオトープ:メディアの生態系をデザインする』紀伊國屋書店, 2005.